

「あかつき」と母との絆

井上 順雄

「虫の知らせ」とは、このことを言うのだ。と思いましたが。何時もは、九時半頃まで喫茶店でコーヒーを飲んでからガラシア病院に母を見舞うのですが、この日に限って九時に箕面の家に戻りました。丁度その時、姉から電話がありました。「すぐ病院に行って！私も追いかけて行くから」。

ガラシアまでの十五分が、この時ほど長く感じたことはありませんでした。母の顔や手はまだ暖かく、穏やかな表情でした。

父が亡くなった時、母は五十歳でした。以来、母は五人の子供を育て上げ、私たちが独立して箕面を離れて行った後も、自宅にとどまり、ひとり生きていく道を選びました。私たちは、母が一人住まいでなくなつた時のために準備を進めていましたが、そんな時に巡り合ったのが「あかつき」であり、母もひと目で気に入りました。

生来、健康であった母も九十歳を超える頃から訪問介護やデイサービスを受けるようになり、ついに幾度かの体験入所（短期入所）を得て二〇〇一年春から「あかつき」でお世話になることになりました。

母は、永年過こしてきた自宅を離れることを納得して、恐らく自分自身を納得させて「あかつき」に入ったもの

の、「あかつき」の皆様や私たちを手こずらせることもありませんでした。関西に住む姉たちは、交代で「あかつき」を訪れ、さまざまな行事にも進んで参加して母を励ましてくれました。

おかげで母は次第に「あかつき」に溶け込んでいくようになりました。私たち兄弟とその家族の励まし、四十年あまりを独りで生き抜いてきた母の精神力によるところもあります。何といたっても「あかつき」の皆さまの献身が母の生活の支えとなりました。

母の通夜の日、法要も終わり、夜も更けたころ、仕事を終えたヘルパーさんが大勢、お参りに来られ「あかつき」の皆さまと母との絆の深さを改めて感じました。

永久の眠りについた母の安らかな顔は、私たち兄弟とその家族への感謝、そして「あかつき」の皆さまへの感謝のあらわれであったと思つています。

あかつきが四十周年を迎えられたと伺い、母との日々を思いおこしつつ「あかつき」の皆さまへのお礼の一文を書かせていただきました。